ISSN 2758-6847

「鹿児島の近現代」教育研究センター

近現代センター通信

創刊号　2023年3月

—目　次—

創刊の辞　1
センター紹介・スタッフ紹介　2
開所式　3
設立記念シンポジウム　4
令和４年度地域マネジメント
教育研究プロジェクト　5
離島の地域課題解決に関する研究プロジェクト：
沖永良部島を対象として　6
澤田ゼミの沖永良部での活動展開について　7
センター関連業績一覧　12
本の紹介　13
鹿児島の近現代文学（1）
一色次郎『左手の日記』　14
寄贈書・今後の予定・編集後記　15

創刊の辞

センター長　丹羽謙治

太宰治は『富嶽百景』の中に「富士には、月見草がよく似合う」という名文句を記しましたが、鹿児島には近代という時代がよく似合います。薩摩の地（島津家の領域）が近代の夜明けを演出した多くの人材を輩出したことからだけではなく、国内最後の内戦を繰り広げ、中央政府の推し進める近代西洋化政策に反対を唱えたことを含めて、南国の太陽の光が作りだす光と影の両面を併せ持っています。

現在から地続きの時代ということから、私たちは近代という時代をまだ正確に捉えることができていません。当たり前と思われていたものが当たり前ではなくなっていることや人間や社会の在り方が大きな転換期を迎えていることを我々は感じ取っています。それが何かということをはっきりとは認識できないまま、日々多忙な生活の中に埋没しています。

明治維新から１５０年余りが経過し、現在から１００年遡っても大正の末期、もう数年すると昭和１００年という時期を迎えています。我々は近代から「学ぶ」時期に来ていると思います。

鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センターは、令和４年１０月に大学の稲盛和夫基金によって設立されました。名前には「鹿児島」と「近現代」という二つのキーワードが入っています。近代、そして現代につながる様々な事象を対象にして、地域の歴史・文化・自然それぞれの資源を活かした研究・教育活動を行い、地域を元気にしていくことを目的としています。地域の資料を保存、整理してそれを多くの方々に使っていただけるようにすることから、観光開発や地域の課題解決、活性化への実際的な取り組みに至るまで幅広い活動を続けてまいります。

鹿児島の近代の実態を明らかにすべく研究を進めるとともに，後世に資料やその成果を伝え、現代の課題解決に向けて取り組んでいきますが、大学の中で完結することなく、学内外の研究者や自治体、企業、一般の方々とともに鹿児島の近代と現代の問題に取り組んでまいりたいと思います。

その活動が、ホームページやこのニューズレターを通じて、学内外の多くの方々へ届くことを祈念しております。

センター紹介

鹿児島の「近現代」の教育・研究およびその成果の地域への還元

本センターは、旧藩時代から現代に至る歴史的遺産、地域的特徴を有する文化、世界に誇る自然環境など鹿児島の地域資源を用いた教育研究活動を推進します。具体的には教育研究基盤整備事業と地域マネジメント教育推進事業という二本の柱があり、前者は文字資料・非文字資料を対象に歴史的な視点から研究を推進し、後者は現代的な課題解決のために文理融合、分野横断的技術を駆使し実践的な教育研究に取組みます。それらの成果を社会実装や地域イノベーション創出として地域へ還元します。

「近現代」への歴史的なアプローチによる教育研究の実践とアーカイブス化

教育研究基盤整備事業では、鹿児島の近現代の様々な史的事象にアプローチし、資料に対して文理双方の技術を駆使して研究を推進します。具体的には、地域に残る一次資料を収集・整理・保存し、これらをデジタル化し、目録やデータベースの作成と公開を行い、多くの人々が民間に埋もれている貴重な資料に触れて活用できるよう、ＨＰから情報を発信します。また、研究の成果を講演会やシンポジウム、出前授業などで広め地域への関心や理解を深めます。以上によって、地域の魅力ある歴史や文化の姿を国内外に発信していきます。

研究成果を自治体・産業界・教育界と連携して地域社会に還元

地域マネジメント事業では、鹿児島ならではの豊かな地域資源を活用した教育研究活動を推進し、その成果を地方公共団体・産業界・地域の住民との連携を通じて社会に還元し、社会実装や地域イノベーションの創出を促します。また、地域の小中高校生、大学生、一般市民に向けた講座や教育プログラムを開発することで、郷土への愛着心を高めるとともに、地域的課題を把握し、その解決と地域の活性化のための取り組みを担う人材の育成に努めます。

スタッフ紹介

センター長　丹羽謙治　教授

日本近世文学・文化史専攻。江戸後期戯作文学、遊郭の出版、薩摩藩の出版・編纂物の研究。共編著に『薩摩藩文化官僚の幕末・明治 木脇啓四郎『萬留』―翻刻と注釈―』（岩田書院）

副センター長　西村　知　教授

東南アジア経済･開発経済学専攻。フィリピン、フィジー、国内離島の集落経済構造を研究。共編著に『Community Business: Searching for a Regional Concept』（ボーダーリンク）、『The Tokara Islands: Culture, Society, Industry and Nature』（Kagoshima University International Center for Islands Studies）。

鈴木優作　特任助教

日本近現代文学専攻。博士（文学）。鹿児島の近現代作家や文芸雑誌文化を研究。著書に『探偵小説と〈狂気〉』（国書刊行会）、共編著に『〈怪異〉とミステリ』（青弓社）。

日髙優介　特任助教

地域マネジメント担当。博士（学術）。社会学の立場から「コミュニティとエネルギー」,「鹿児島県の島々の変化」,「発達障害児支援」などについて取り組んでいます。

河野彩子　特任専門員

センターの事務を担当。

開所式

令和4年10月1日、「鹿児島の近現代」教育研究センターの設立を記念して、郡元キャンパス総合教育研究棟2階ロビーで開所式が行われました。式には、佐野 輝学長、越塩 俊介理事（総務担当）、岩井 久理事（企画・社会連携担当）、学内の部局長や来賓の松尾 千歳尚古集成館館長など21名が出席しました。

佐野学長、松田学部長の挨拶に始まり、センター長と新規採用された特任教員2名による自己紹介と挨拶がありました。

記念撮影の後にはセンターの設置された3階に移動し、看板の除幕式とセンター内部の公開が行われました。センター内には、鹿児島の近代から現代にかけての地図がいくつも展示されており、ご出席された皆様の興味を集めていました。

センター内部のご案内に続いて行われた記者発表では、多くの質問が寄せられ、マスメディアの関心の高さがうかがえました。こうした開所式の模様は当日から10月4日にかけて報道され、地域の皆様にも当センターが広く認知されたことと思われます。

設立記念シンポジウム
「鉱山の鹿児島～近代化を鉱山から読み解く～」

本センターは、令和4年11月23日、稲盛会館にて設立記念シンポジウム「鉱山の鹿児島～近代化を鉱山から読み解く～」を開催いたしました。本センターの教育研究の中心である「近代化」を、鹿児島に多く存在した鉱山との関わりから考えるという趣旨です。

シンポジウム前半の講演の部、最初の講演では、鹿児島大学名誉教授の大木公彦先生が「地球からの贈り物　火山の恵み」との演題で、鹿児島が鉱物資源に恵まれている理由や、鹿児島は錫や金だけでなく、鉄や硫黄、タングステンなど多様な鉱物資源を元来有していたことなどを解説しました。

次の講演では、同じく鹿児島大学名誉教授の志賀美英先生が、江戸時代に薩摩藩営として稼働していた鉱山の中で谷山地区の錫山鉱山に焦点を当て、その成り立ちや藩政期の運営の仕組み、近代化における変化などについて解説しました。

第二部のパネルディスカッションでは、講師二人に尚古集成館の松尾千歳館長が加わり、丹羽謙治センター長の司会のもとに議論が深められました。薩摩藩の英国留学生には鉱山開発の技術習得の使命もあったこと、島津斉彬の時代に電気を使い発破をかけ坑道を掘り進める実験が行われていたこと、谷山の錫山では嘉永6（1853）年に新たな鉱床が見つかっているが、その10年ほど前には薩摩にイギリスやフランスが接近してきていたことから、当時の大砲に使う錫の鉱脈を見つけたのはおそらく偶然ではなく意図していたことだろうということなど、鉱山と近代化にまつわる様々な話を聞くことができました。

北は北海道から南は徳之島まで、オンライン参加や当日参加も含めると、130名以上の方々にご参加いただきました。

令和４年度地域マネジメント教育研究プロジェクト

令和4年度の地域マネジメント教育研究プロジェクトとして、12件の企画が進められています。これらの成果について、令和5年5月に開催予定の「プロジェクト報告会」にてご報告させていただきます。

1. 地域的特性を踏まえた新たな地域の文化的創生に関する取組み

・現代文化創出の「場」形成プロジェクト
　菅野康太（法文学部人文学科）、酒井佑輔（法文学部法経社会学科）、
　太田純貴（法文学部人文学科）、農中至（法文学部法経社会学科）、清水香（教育学部）

・現代アートを軸とした地域の有形・無形の知財の発掘・活用
　太田純貴（法文学部人文学科）、菅野康太（法文学部人文学科）、
　農中至（法文学部法経社会学科）、酒井佑輔（法文学部法経社会学科）、清水香（教育学部）

・GIS を活用した沖永良部バナナマップ作成プロジェクト
　澤田成章（法文学部法経社会学科）

2. 本学および地域が所蔵する歴史的・文化的資源の地域への還元

・近代鹿児島における在地窯業の考古学的研究
　渡辺芳郎（法文学部人文学科）

・近現代における奄美島唄の伝承の変遷に関する研究
　梁川英俊（法文学部人文学科）

・鹿児島大学が所蔵する近代化に関わる法学・政治学分野の貴重書の電子化事業
　鳥飼貴司（法文学部法経社会学科）、米田憲市（法文学部法経社会学科）、
　植本幸子（法文学部法経社会学科）

3. 地域的課題把握とその解決に向けた取組み

・沖永良部島における食料自給率向上に向けたボトルネック探求プロジェクト
　澤田成章（法文学部法経社会学科）

・近代から現代に繋がる沖永良部島の社会経済、教育に関する調査・資料収集
　西村知（法文学部法経社会学科）、中谷純江（総合教育機構グローバルセンター）、
　日髙優介（法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター）

・鹿児島市上町地区における歴史を活用した持続可能なまちづくり推進プロジェクトのための調査・分析プロジェクト
　金子満（法文学部法経社会学科）

4. 教育・地域マネジメント人材育成プログラムの開発・推進

・指宿の地域資源の探求：鹿児島大学法文学部と指宿高等学校の連携事業
　石田智子（法文学部人文学科）、吉田明弘（法文学部人文学科）、
　兼城糸絵（法文学部人文学科）、馬場武（法文学部法経社会学科）

・霧島国際音楽祭の価値創造メカニズムの解明と芸術文化事業マネジメント人材育成プログラムの開発
　馬場武（法文学部法経社会学科）、林田吉恵（法文学部法経社会学科）、
　農中至（法文学部法経社会学科）

・かごしま国体等「観戦・観光ガイドブック」作成・地域観光人材育成プロジェクト
　小林善仁（法文学部法経社会学科）、南直子（法文学部人文学科）、
　永迫俊郎（教育学部）

離島の地域課題解決に関する研究プロジェクト：沖永良部島を対象として

副センター長　西村　知

沖永良部島は、奄美群島の南西部に位置する島で、和泊町と知名町の2町からなる。2022年4月現在の和泊町人口は、6216人、知名町人口は、5611人で、両町合わせて、11,827人であった。ジャガイモ、テッポウユリやフリージアなどの花卉、さとうきびなどの農業生産が盛んである。

この島は、人口減少・高齢化による労働力不足、食の自給率の低さなど、多くの離島に共通の諸課題を抱えている。一方で、かつてのユリの輸出や外国人労働力導入などグローバル経済への対応力、高い教育意識、地域共同体の強さなどの課題解決に必要な強みを備えている。また、温暖な気候は、農業を中心とした新しいビジネスの可能性を示すとともに、島内の食糧自給率向上をもたらす自然資源として、期待されている。沖永良部島は、温暖な気候に属する離島地域における地域課題解決策を考察するうえでの格好の研究対象地である。

令和４年度近現代教育研究センター地域マネジメントプログラムでは、沖永良部島を対象とした３つのプロジェクトが、進んでいる。第一は、「近代から現代に繋がる沖永良部島の社会経済、教育に関する調査・資料収集」（法文学部教授　西村知、グローバルセンター教授　中谷純江、「鹿児島の近現代」教育センター特任助教　日高優介）である。このプロジェクトは、近代から現代までの沖永良部島において、グローバル経済と島民がどのような関係性を構築してきたか、その過程で、女性や家族、地域共同体がどのように変容したか、教育とこれらの社会経済の変化にはどのような関係性があったのかという課題について、文献収集、聞き取り調査に基づきながら、経済学、社会人類学、社会学、教育学の観点から明らかにすることを目的としている。ここでいう「グローバル経済」とは、具体的には、前述のユリの輸出、1980年代からのフィリピン人女性の島への定住化、1990年代からの外国人技能実習生、数年前からの特定技能外国人労働者の受け入れである。「グローバル経済」の受け入れ、島外経済への過度な適応は、島の持続的な社会経済にとって諸刃の剣である。例えば、島の農業がユリの輸出や島外への出荷に特化してしまった場合、島の食糧自給率が低下し、長年、培われた島の食文化が消失しかねない。

第二の「沖永良部島における食料自給率向上に向けたボトルネック探求プロジェクト」（法文学部准教授　澤田成章）は、まず、島内食糧自給率の変化を把握し、具体的な提言を行おうとするものである。このプロジェクトでは、沖永良部島の食料自給の実態について、和泊町学校給食センターのデータについての分析、島内の農畜産物の生産状況の時系列分析、昭和50年以前から家庭の調理場に立つ方々へのヒアリングを通して明らかにする。これらの取り組みからは、島の食卓のレジリエンシー向上を通じたSDGsへの貢献等が期待される。

このような実態把握とともに重要なのが、具体的な政策を示すことである。食料自給率の向上に関しては、対象作物の特定、その利用の可能性の提言が重要である。第三の沖永良部島関連研究プロジェクト、「GISを活用した沖永良部バナナマップ作成プロジェクト」（法文学部准教授　澤田成章）は、このコンテキストに位置づけられる。沖永良部島は、温暖な気候により、バナナ愛好家、海外からの帰国者、外国人定住者が、作付けした様々な種類のバナナ

が、生育している。この研究プロジェクトは、これまで把握されていなかった沖永良部島における民家のバナナ栽培の実態について、アンケート調査に加えGISを用いてバナナ株の種類・本数・分布のデータベースを作成する。そして、自治体DX推進の観点からバナナを通じた地方創生に向けたデータベースの構築を目指す。今後、バナナの利用において、重要なプレーヤーとなると考えられるのが島の定住フィリピン人である。彼女らは、島産の調理バナナを関東方面に出荷したり、調理して、島内で販売したりしている。顧客は、いまのところは、フィリピン人のみである。島の食糧自給率の向上においては、これまで島民が食べてきた伝統食を活性化、復活させるだけではなく、このような定住外国人発の「新しい島の食」に目を向けることも有効である。

沖永良部島の島民は、グローバル経済を含め、島外との関係を、懸命に構築してきた。その結果として、島の経済が活性化した面はあったが、環境、食糧の自給においてマイナスの面も生じてきた。今後は、島外との関係を人と自然の両面から持続的に再構築する必要がある。上記の３研究プロジェクトは、このような新しい離島の持続的発展像を描くうえでの貢献が期待される。

澤田ゼミの沖永良部での活動展開について

鹿児島大学法文学部法経社会学科経済コース准教授　澤田 成章

１．はじめに

澤田ゼミでは、平成27年度より沖永良部島和泊町をフィールドとした研究・調査を進めさせていただいている。当初は公会計改革に関連した公共施設マネジメントの文脈でのつながりのみであったが、島の方々との関りが深まるにつれ、扱うテーマも年々拡がりを見せている。

たとえば、2018年度末に年度の研究成果の報告会を和泊町役場にて開催させていただいた折、役場職員の方から島に漂着するマイクロプラスチックの問題を学生の力でどうにかできないかとの相談をいただいた。本ゼミは、本来は簿記・会計（財務会計論）のゼミであることから、漂着ゴミ問題はまったくの素人であった。そこで、そもそもマイクロプラスチックを回収するのがなぜ困難なのか、実際に砂浜にでてビーチクリーン活動を行い、マイクロプラスチックを拾う際の効率と他のごみを拾う際の効率を比較するためのデータ収集から始めた。理系の学生とは異なる、文系学生ならではの観点からマイクロプラスチック問題がなぜ解決困難であるかを解明し、ボトルネックを解決するような仕組みに関して提言を行った。活動結果をまとめたレポートは、2019年度NRI学生小論文コンテストの大学生の部で大賞をいただいている。

近年は沖永良部の人々のくらし、とりわけ食と教育に関する分野を中心に研究対象を拡げ、「鹿児島の近現代」教育研究センターの地域マネジメント部門の１つとして活動させていただいている。本稿では、2023年2月現在で進行中の教育・研究・調査プロジェクトについてご紹介させていただく。

２．プロジェクト全体のコンセプト

澤田ゼミが沖永良部で実施するプロジェクトは、基本的には先述のように島の方々との交流の中から自然発生的に発見される課題の原因究明および課題解決に向けたプロジェクトである。学問に基づいたなんらかのフレームワークが先に存在し、そこか

ら導出される仮説を検証するためにフィールドに出向くタイプのものではない。ある側面から見れば統一感のない場当たり的なプロジェクト群として見えるし、ある側面から見ればアカデミック色の薄いプラグマティックなプロジェクト群とも見える。こうした側面を持ちながらも、国立大学法人鹿児島大学の研究費をいただきながらプロジェクトを進めることができているのは、以下の２つのポイントを一貫して大切にしてきたからであろうと考える。

第1に、真摯に現象を見つめる姿勢である。地方国立大学の学生（および教員）が現場に出向いて地域課題を発見するに際して、自分たちが外部の何も知らない人間であることを強く自覚して真摯に現象を見極めようとする姿勢を大切にしたい。

もちろん、事前に学問的な知識や他自治体の事例など、大学内でも可能な調査はある程度実施する。ただこの知識が厄介で、ついつい予断を持って島の人たちの言葉を聞いてしまいがちである。小学校から高校までの教育を通じて、学生には（あるいは、教員にも）すでに持っている知識と関連付けて新しい情報を理解する癖がついている。「集落の人口が減ってきて、若い人がいなくなった」と聞けば、すぐに「空き家問題だ！」「町内会行事の担い手問題だ！」「商店街に活気を！」と、現地で起きている現象とは関係のない（かもしれない）知識が頭から引き出されてしまいがちである。

本ゼミでは、勝手な妄想で地域課題をでっちあげるのではなく、島の人たちの言葉に耳を傾け、かといって島の人たちの語る地域課題すべてをそのまま地域課題として認識するのでもなく、本当にそんな現象が起きているのか、起きているとしたら誰にとってどのように問題となっているのか、地域課題を具体化・明確化することを大切にしている。

第2に、データに基づいて議論することである。地域課題を具体化・明確化するためには、客観的なデータが必須である。ヒアリングを通じて得られるのは、島の人たちがそれぞれの眼鏡から見た主観的な島の現象であり、同じ集落のひと同士でも相反する証言が得られることも珍しくない。そこで本ゼミは、自分たちに都合の良いヒアリング結果をチェリーピッキングするような姿勢を戒めるためにも、データを収集して客観的に裏付けをとることを重視したい。

たとえば、3.2で取り上げる島バナナプロジェクトでは、「島バナナが余ってもったいない。毎年たくさん棄ててしまっている」という声もあれば「島バナナは余っていない。棄てるようなことはめったにない」という声もある。本ゼミの確認した範囲では、沖永良部の島バナナは沖縄や奄美大島と比較してキロ単価で半額から1／4ほどの値段で売られている。おそらく供給過多による値崩れが生じているのだが、人によっては余っていないという。なぜこのような認識の相違が生じるのか、実際に島バナナは余っているのか余っていないのか、データを取って調べてみないことにはどんなメカニズムがはたらいているのかはわからない。こうしたヒアリング結果が矛盾する点こそ、アカデミックの人間が客観的・中立的に問題の全体像を明らかにするべきポイントであると考えている。

３．個別のプロジェクト

3.1　学校給食使用食材調査

沖永良部は農業の盛んな土地である。しかし、生産される農産物はほとんどが出荷用であり、島内での消費は多くない。たしかに、島のスーパーマーケットを訪れてみると、地産地消コーナーには島内で生産されたとみられる野菜類や魚類が陳列されて

いるが、島外産・県外産の野菜類・肉類・魚類も少なくない。ところが、島の人たちの話を聞くと、島の人たちはそれぞれに畑の隅で自給用野菜を作っており、島外産の食品を購入することはあまりないという。実際のところ、沖永良部の食料自給はどの程度のものなのだろうか。

学校給食センターのご協力をいただき、食材納品伝票を集計してみたところ、平成30年度で使用食材のうち島の中で生産されたものの割合は約18%だった。農産物を出荷して得た外貨を活用して島の外から買ってきた食材で島の子供たちの給食が成り立っていると考えることができる。

学校給食に使用される島内産品を詳細に分類していくと、豆腐・厚揚げ・島かまぼこといった品目が全体の半分を占めている。しかし、これらの原材料となる大豆や魚のすり身は島外から移入したものである可能性が高い。少なくとも学校給食に関しては、実質的な自給率という点では10%にも満たないということが分かっている。

沖永良部ではここ数年、大型台風の直撃や停滞型の台風により、1週間程度フェリーが入港できないことが毎年のように発生している。災害へのレジリエンシーという意味で、沖永良部は脆弱性を抱えた島であると言わざるを得ない。

こうした観点から、継続的に和泊町学校給食センターから食材調達伝票を提供いただき、データベース化して島の子供たちの食料事情を定点観測するプロジェクトを進めている。

3.2　地域資源利活用プロジェクト（島バナナ）

沖永良部島には多くのバナナが生えている。自生する糸芭蕉はもちろんのこと、いわゆる島バナナとして食用にできるものもたくさん生えている。そもそも、沖永良部の島バナナは出荷用の作物ではない。バナナ農園で大規模に栽培しているのはごく数件であり、ほとんどのバナナは民家で個人消費用に栽培されている。しかし、バナナは1本の木から一度に大量に収穫されること、およびそれらが同時に熟して食べごろを迎えることから、切り分けられて贈り物にされたり、直売所や地産地消コーナーに並んだりする。

しかし先述のように、沖永良部の島バナナは値崩れが生じており、その意味では未活用の地域資源が眠っているとみることもできる。そこで、本ゼミでは大きく3つの観点から島バナナに関連したプロジェクトを進めている。

3.2.1　GIS を用いた沖永良部バナナマップ作成プロジェクト

沖永良部のバナナは出荷用でないことから、役場で農政を担当する経済課でもバナナの生産数や品種、分布について把握していない。そこで、まずはこれらを1本1本丹念に数え上げ、本数・品種・分布などをデータベース化することが必要である。

本プロジェクトでは和泊町役場および地域科学研究所の協力のもと、2つの側面から沖永良部島のバナナ栽培の実態解明を試みるとともに、バナナを通じた地方創生に向けたデータベース構築を目指す。

（A）各字の区長さんに協力いただき、全世帯へのアンケート調査を行う。各世帯が保有するバナナの株数・種類および利用実態について回答いただき、少なくとも沖永良部島内では初のバナナデータベースを構築する。

（B）小中学生の自由研究企画として各小学校区内に生えているバナナ株の種類・本数・分布を明らかにする。和泊町役場が推進する自治体 DX に向け、町民情報を複合的に管理する試みの第1歩として、またデジタル教育の新しいモデル構築のための試

みとして、実施する。鹿児島大学学生がGIS端末操作、やヒアリング方法等について小中学生を指導し、相互に学び合う環境構築を狙いとする。

3.2.2　バナナ価格正常化に向けたビジネスモデルの探求

沖永良部のバナナが値崩れするのは、おそらく沖縄や奄美大島と比較して島外からの観光客が少なく、需要の側が供給に追い付いていないためであると考えらえる。本プロジェクトではこの仮説の元、島バナナを集荷し、適正価格で消費地に送り届けるためのビジネスモデルを探求している。

具体的には、各家庭であまった島バナナを集荷して追熟したのちに小分け冷凍し、都会の喫茶店等にバナナジュース用で出荷する方法が候補として考えられている。すでに第1弾として、ゼミ生が携帯電話の販売代理店の販促の一環としてバナナジュース無料配布イベントを2回実施し、味や食感の感想をアンケートで蓄積している。また、鹿児島県内の喫茶店にサンプルを提供し、レシピ開発とテスト販売を実施いただいている。

3.2.3　バナナ豚・バナナ葉茶プロジェクト

バナナの余剰の問題は、果実部分だけではない。バナナは収穫時には2mから4mほどに成長し、木の幹のような偽茎を形成する。この偽茎や葉は、実をつけるとあとは枯れるだけであるが、多くの場合畑に放置されて自然に肥しとなっている。本プロジェクトでは、これらの偽茎や葉を別の形で活用する方法を、農学部の大塚教授協力のもと模索している。そこで目を付けたのが豚の飼料およびバナナ葉茶である。

沖永良部ではかつては多くの家庭が豚を飼育し、正月や慶事には潰して食用としていたという。琉球文化の色濃い沖永良部では、豚を食用とすることが昔から食文化として根付いていたと考えられる。

「しかし、昭和30年代後半から、沖永良部島内の豚の飼養頭数は少しずつ減少していき、平成初期には1頭も育てられなくなった。すなわち、今日、沖永良部島の食卓に並ぶ豚肉は、すべてを移入に頼っている。歴史的に長い間、沖永良部島に根付いていたはずの養豚文化は、わずか約30年の間に、衰勢に向かい、そのまま途絶してしまった。令和5年現在、この原因が明確には整理されていないまま、養豚の途絶から25年が経っている」（本ゼミ令和5年3月卒業生飯塚氏の卒業研究より）

バナナの偽茎や葉が島内調達可能な豚の飼料として有効であれば、断絶した養豚を復活させるための1つの経済合理性となるかもしれない。少なくとも、バナナの葉はお茶の原料としてヒトの健康面にポジティブな効果を及ぼすことが知られている。

3.3　沖永良部の学校教育の実態調査

和泊町は、町の将来負担比率が鹿児島県の市町村でワーストとなるなど、財政健全化が大きな課題となっている。老朽化した公共施設の取捨選択、いわゆる公共施設マネジメントが求められていると言えよう。和泊町は4つの小学校と2つの中学校を抱えており、これらを合わせた学校教育系施設が全公共施設の延べ床面積の30%を占めている。和泊町にとって小中学校統廃合は喫緊の課題であると言えるが、小中学校の統廃合は子供たちの生活パターンを大きく変える可能性がある。同じ奄美群島に位置する喜界町では小学校の統廃合を強行した結果、地域コミュニティが崩壊したという話もあることから、小中学校統廃合の議論は単なる金勘定だけで判断できるようなものではない。

そこで、小学生・中学生の立場から、小中学校の統廃合にどのような影響がありう

るかを明らかにするために、小中学生の行動パターンを明らかにすることを検討している。とりわけ、いじめ・いやがらせ・仲違いなど、ネガティブなイベントに対する小中学生の対処パターンを調査することにより、「小さなコミュニティの限られた人間関係を維持すること」「統廃合により1カ所に集めて大きなコミュニティ・人間関係を形成すること」双方での学校問題への対処について明らかにしようと考えている。

3.4　沖永良部の郷土資料収集・データ化プロジェクト

沖永良部島には、さまざまな形で郷土資料が存在する。本ゼミが2022年度に注目したのは、島の手作りレシピ集である。発行から30年以上が経過した令和4年時点でも参照する家庭が多いという。昭和59年に発行されたこのレシピ集は島の人々が協力して作り上げたものであり、島でとれる作物を美味しく調理するための知恵が詰まっている。現代の沖永良部の食文化を底支えする意味を持つだけでなく、昭和末期当時の食文化を現代に伝える貴重な郷土資料であるといえる。しかし、本として出版されたものでなく、あくまでも個人出版のような形で簡易製本されただけであったことから、歴史民俗資料館や図書館には保管されていなかった。

そこで、澤田ゼミでは島の奥様方にご協力いただき、できるだけ保存状態の良いレシピ集を取り寄せ、スキャンして電子データ化した。また、スキャンデータにトリミングや背景カットの処理を行い、当時のレシピ集の姿そのままに復刻させるプロジェクトを推進している。

3.5　公用車の効率的・効果的利活用に向けた調査

和泊町役場ではここ数年、公共施設マネジメントの取り組みが本格化しているが、これまで公用車はあまり注目されてこなかった。公用車は各課が補助金等を活用して独自に購入するなど、一元管理できていなかったことから、役場全体としての効率的・効果的な公用車の活用を検討するのが困難だったためである。

そこで、澤田ゼミでは和泊町役場公共施設マネジメントプロジェクトチームにご協力いただき、2022年6月の1か月間、公用車の利活用データを詳細に記録いただき、それを集計・分析することによって今後の公用車の効率的・効果的な利活用に向けた報告書を作成し、職員研修の教材として整理した。

4．むすびに代えて

本ゼミがこうして和泊町をフィールドとして様々な教育・研究・調査プロジェクトを実施させていただけているのも、我々を取り巻く多くの方々のお力添えあってのことである。和泊町役場の方々には、本来の業務がお忙しいにもかかわらず、快くデータを提供いただき、毎年3月に報告会を役場ホールにて開催せていただいている。「鹿児島の近現代」教育研究センターのスタッフにも、資金面だけでなく多方面でサポートいただいている。

こうした支えをいただいた結果、2022年度は延べ人数で10名以上の学生が沖永良部を舞台に地域課題の発見と解決に向けた調査・研究を行い、成長させていただいている。感謝を申し上げるとともに、今後の積極的な成果報告をお約束したい。

センター関連業績一覧

論文

○日髙優介・澤田成章・西村知「『教育の島』沖永良部島出身医師の研究――言説の構築に着目して」『経済学論集』100　2023年3月　鹿児島大学法文学部

○西村知、ニシムラ・ジョアン・テハダ、スリット・アロンドラ・ゲイル・トレス、日髙優介「沖永良部島における外国人労働の実態と将来展望」『経済学論集』100　2023年3月　鹿児島大学法文学部

○澤田成章「和泊町学校給食センターの島内産品使用割合の変化」『経済学論集』100　2023年3月　鹿児島大学法文学部

○渡辺芳郎「短命な窯：鹿児島県指宿市山川鰻窯跡の事例」『江戸遺跡研究』10　2023年3月　江戸遺跡研究会

○梁川英俊・安妮（アンニ）「奄美における島唄教室の現状と可能性―2021～2022年における島唄教室の調査から」『人文学科論集』90　2023年2月　鹿児島大学法文学部

講演・口頭発表等

○日髙優介「沖永良部島の社会移動――島出身の医師に焦点を当てて」日本島嶼学会2022年度沖永良部大会　2022年10月23日

○中谷純江「近現代エラブ社会における女性の行為主体性」日本島嶼学会2022年度沖永良部大会　2022年10月23日

○西村知他「沖永良部島和泊町における外国人労働をめぐる現状と展望」日本島嶼学会2022年度沖永良部大会　2022年10月23日

○澤田成章「沖永良部島の食料自給の実態に関する研究」日本島嶼学会2022年度沖永良部大会　2022年10月23日

○渡辺芳郎「短命な窯：鹿児島県指宿市山川鰻窯跡の事例」江戸遺跡研究会第180回特別例会　2022年7月17日（オンライン）

○梁川英俊「奄美島唄はブルターニュにその兄弟を持つか？」奄美シマウタ研究会　2023年1月17日　オンライン

日本島嶼学会2022年度沖永良部大会における日髙特任助教の口頭発表

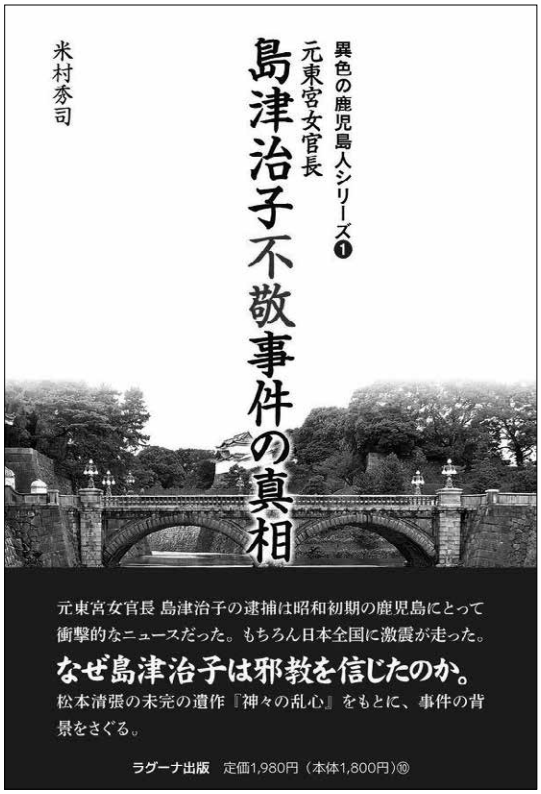
本の紹介

米村秀司『元東宮女官長　島津治子不敬事件の真相』ラグーナ出版（2021）

郷土史家である米村秀司による同書は，昭和11年に島津久光の孫であり，元東宮女官長であった治子が不敬罪で逮捕された顛末について探究が進められている。著者は牧野伸顕（大久保利通の子）ら同時代人の日記や新聞報道を丁寧に整理し，昭和初期の政財界・軍閥における薩派の弱体，妻であり母であった女性としての治子，そして政治と宗教の結びつき，などからこれに迫っている。不敬事件後治子の名前が登場するのは昭和45年の治子の死亡記事であった。この間の空白について，著者は「封印・沈黙・忘却の事件処理」がおこなわれたと考察する。

今日，政治と宗教をめぐる社会問題が顕在化している。本書で取り扱われた近代の社会問題の現れと帰結は，現代における類似する社会問題の過程へと知見を与えうると考える。

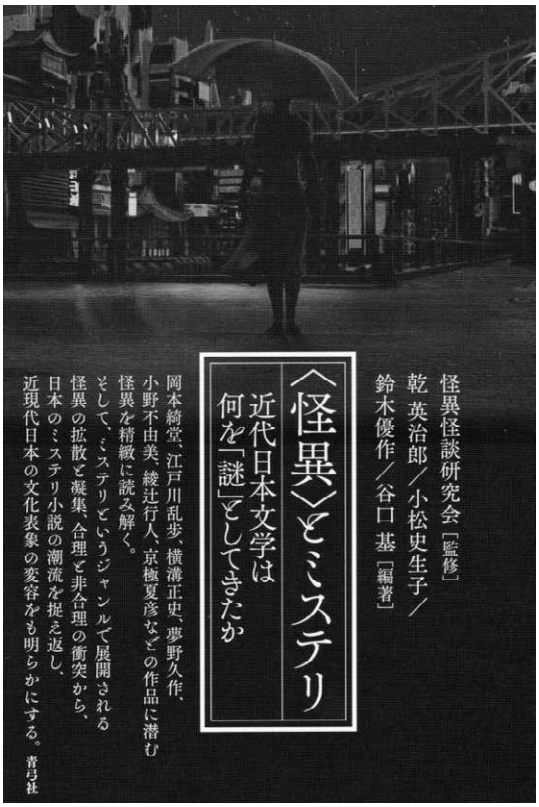
（日髙優介・社会学）



怪異怪談研究会監修／乾英治郎・小松史生子・鈴木優作・谷口基編『〈怪異〉とミステリ』青弓社（2022）

謎の合理的解明を主眼としたミステリ・ジャンルは、非合理な存在である怪異・怪談・怪奇幻想・ホラーといかに向き合ってきたのか。岡本綺堂、江戸川乱歩、横溝正史、夢野久作、戸川昌子、小野不由美、綾辻行人、京極夏彦などミステリの代表的な作家の作品はもちろん、四代目鶴屋南北や芥川龍之介、「故人サイト」やゲーム「逆転裁判」シリーズなどをも分析する。

（鈴木優作・日本近現代文学）



鹿児島の近現代文学（1）　一色次郎『左手の日記』

沖永良部島出身の作家・一色次郎（本名大屋典一1916–1988）は第3回太宰治賞を受賞した「青幻記」（1967年）で知られる。同作は小学校5年生の一色が結核を患った母と島で過ごした半年とその死までを題材としている。一色の活動は文学に留まらず空襲実録、死刑廃止運動など多岐にわたるが、八合事件で獄死した父の無実を突き止めた「太陽と鎖」（1964年）でも知られ、「三歳のとき父が、一〇歳のとき母が非業の死を遂げる」（『日本近代文学大事典』）というように父母の不幸な死が第一に注目され、創作の大きな動因ともなっている。

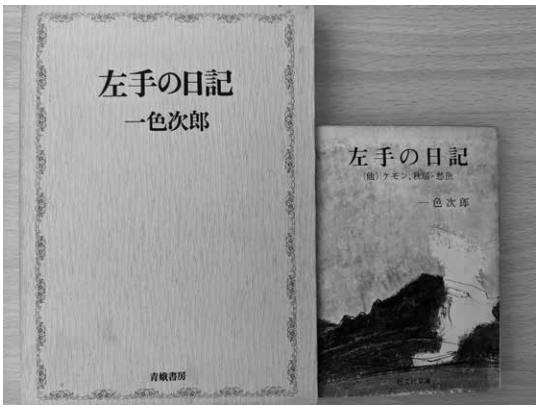
そんな一色の素顔を知る資料として18–19歳の日記『左手の日記』（1973年）があり75年に文庫化の際は詳細な年譜も加わる。しかし同書の月報で野口冨士男は日記中の「路面電車」という呼称が当時なかったことなどから後に「手がくわえられている」と指摘しており、そもそも文学者の「日記」とは虚構と現実のあわいにある。

この日記が単なる記録に止まらないとすれば、一色は何を表現したのか。それは一口に言えば、自らの死への自覚が絶えず突き動かす、創作への衝動といえる。

> こんど、じょうぶになったら、東京へ行きたい。東京へ行って、文学したい。あと五年、あと、三年、一年でいい。（中略）書く。死んだっていい。書いてやる。

当時一色は心臓脚気を患っていた。頼りない自らの生を文学に賭すという、率直な死への怖れと文学への志向が隣合せにされた記述が日記には幾度も反復されている。だが見逃せないのは同書における「俺」の企投が物語外の現実の一色の存在によって成功が保証されていることで、そのため同書は無名の少年が死と向き合いつつ創作と格闘する姿を描きながら読み手はその後年の成功を把握しているという周到な物語性を内包している。さらにこの物語は死（の意識）から生成されるという構造において父の物語「太陽と鎖」、母の物語「青幻記」と相同的関係にあるといえ、一色文学の基調が垣間見える。

（鈴木優作・日本近現代文学）



一色次郎『左手の日記』（青蛾書房、1973年）
同『左手の日記他二編』（旺文社文庫、1975年）

『青幻記』の舞台となった、一色の故郷・沖永良部島の海

寄贈書

窪壮一朗『明治維新と神代三陵　廃仏毀釈・薩摩藩・国家神道』法藏館、2022年6月刊（2022年8月24日　窪壮一朗様より）

米村秀司『元東宮女官長　島津治子不敬事件の真相』ラグーナ出版、2021年12月刊（2022年10月13日　米村秀司様より）

米村秀司『権力に対峙した男―新・西郷隆盛研究―下巻』ラグーナ出版、2018年3月刊（同上）

米村秀司『消えた学院　日中共学を実践した「青島学院」の三十年を追う』ラグーナ出版、2011年7月刊（同上）

米村秀司『昭和金融恐慌と薩州財閥―川崎造船所・十五銀行　崩壊の軌跡』ラグーナ出版、2020年10月刊（同上）

今後の予定

3月17日に鹿児島大学学習交流プラザ2F 学習交流ホールにおいて「令和５年　春のシンポジウム　日本とイタリア―社会と文化の諸相」が以下の内容で開催されます。

1. フィレンツェ大学鷺山郁子教授特別講演「イタリアにおける日本文化―文学を中心に」
2. 本センター鈴木優作特任助教研究報告「ミステリが架橋する日本とイタリア」
3. 本学増留麻紀子助教研究報告「日伊で活躍した建築家松井宏方の建築表現」
4. トークセッション「日本とイタリア　近現代の社会と文化を語る」ファシリテーター・本学藤内哲也教授、パネリスト・鷺山郁子教授、センター長丹羽謙治教授、鈴木優作特任助教

5月にはセンター主催の地域マネジメントプロジェクトの報告会を開催する予定です。

編集後記

創刊号ということで構成やレイアウトなどゼロからの編集でしたが、無事に発行することができて安堵しています。センターからの発信であるとともに、読者が充分に楽しめる読みでのある誌面づくりをしよう――そんな思いを念頭に、多くの方にご協力を頂き様々なコンテンツを盛り込みました。この思いが皆様に届けば幸いです。（鈴木）

近現代センター通信　創刊号

2023年3月31日

発行　鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター
〒890－0065
鹿児島県鹿児島市郡元一丁目21－30
電話　099－285－7532
メール　kingendaijim@leh.kagoshima-u.ac.jp
https://kadai-kingendai.jp/

鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター

令和５年 春のシンポジウム

日本とイタリア
―社会と文化の諸相

令和５年
3/17(金)
13:40～17:00
(開場 13:00)

会場 鹿児島大学学習交流プラザ2F
学習交流ホール 定員50名 参加費無料

WEB配信 Zoomウェビナー
同時配信 定員300名 参加費無料
※要事前申し込み(会場・ウェビナーとも)

申し込み方法：WEB
※電話・メールによるお問い合わせ可
応募締め切り 3/15(水)
※お申し込み方法については右上のQRコードをご覧ください。
※定員に達し次第応募を締め切らせていただきます。

プログラム

特別講演
「イタリアにおける日本文化 ― 文学を中心に」
フィレンツェ大学　鷺山 郁子 教授（日本語学文学）

研究報告1
「ミステリが架橋する日本とイタリア」
鹿児島大学　鈴木 優作 特任助教（日本近現代文学）

研究報告2
「日伊で活躍した建築家松井宏方の建築表現」
鹿児島大学　増留 麻紀子 助教(建築学)

トークセッション
テーマ **「日本とイタリア 近現代の社会と文化を語る」**
〈ファシリテーター〉 鹿児島大学　藤内 哲也 教授（イタリア中近世史）
〈パネリスト〉 鷺山 郁子、丹羽 謙治、鈴木 優作

グレゴッティ事務所での松井

イタリア時代の松井とグレゴッティ

お問い合わせ先 **「鹿児島の近現代」教育研究センター**
https://kadai-kingendai.jp/　TEL 099-285-7532　E-mail:kingendai.jim01@gmail.com

主催：鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター
後援：南日本新聞社（申請中）・MBC南日本放送（申請中）・(公財) 鹿児島県国際交流協会（申請中）・(公財)鹿児島市国際交流財団（申請中）
鹿児島大学総合教育機構グローバルセンター・鹿児島大学国際島嶼教育研究センター